

## 第2 教育研究団体の意見・評価

### ○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 太田 達也 会員数 約530人)

T E L 03-5950-1147

#### 1 前 文

(本試験の評価書に同じ。)

試験のバランスを見るために、追・再試験問題は同年度の本試験と比較する。

#### 2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等

大問の構成(大問1～7)、出題形式、総設問数(全51問)、配点とも、本試験と同じである。

ドイツ語総語数(のべ語数)は1,959、総語彙数(単一語の初出回数)は637である。本試験は総語数2,215、総語彙数684であり、本試験とほぼ揃っている。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典(見出し語6～8万語程度)で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は11語であった(★)。

★ Beitrag, Betrug, Einrichtung, Faulenzen, Investition, Knabberzeug, Risiken, riskant, Tauziehen, Tätigkeit, Weile

本試験ではやや難語と思われる語は6語であったことと比べると、追・再試験はやや難語が多く含まれていると言える。なお、これら11語とも、一般的な独和辞典において基礎語彙扱いではないが見出し語として挙げられてはいる(Tauziehenにおいては、ziehenは基礎重要語であるがTauが重要度の下がる見出し語である)。ただ、11語中、Beitrag, Faulenzen, Investition, Risiken, riskant, Tau, Tätigkeitの7語が大問7に集中していることは指摘しておきたい。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 設問数(7)、頁数(2)、配点(21)及び問題構成、設問は本試験とほぼ同等で、問2における設問形式上の変更点も本試験と同様である。語彙に関しては本試験よりもやや難度は低くなっているが、身につけるべき基本語彙を扱っており、重要な基本事項の理解度を確認するうえで総じてよく練られた問題である。

問1 形容詞に含まれる母音aの長短を問う問題である。schmalは語彙としてはやや難度が高いが、子音連鎖の前は短母音になるという基本的知識が身につけていれば正解できる。

問2 子音gの発音を問う問題である。本試験と同様に、語彙を同一文中におさめる設問上の変更があった。基本語彙であるSamstagabendが母音で始まるAbendとの合成語であることからgが語末の無声音であることは容易に導き出せる。

問3 本試験では職業を表す名詞とその関連語のペアだったが、追・再試験では国名と国籍を表す名詞のペアから、アクセントの位置が同じものを選ばせる問題である。基本的な発音知識を問う良問である。

問4 選択肢にある動詞全てに含まれる語幹の短母音eのうち、3人称単数が主語の場合に別の母音に変化するものを選ばせる問題である。選択肢の動詞はどれも基本語彙であり、正確な知識を問うには適切な問題である。

問5 選択肢にある動詞の語幹に含まれる母音eのうち、過去分詞にした場合に別の母音に変化するものを選ばせる問題である。正答であるtreffenだけでなく、その他の動詞の過去分詞形も正確に知っておく必要がある。過去分詞形についての正確な知識を問う良問である。

問6 名詞を複数形にしたときに、語尾-sが付かないものを選ばせる問題である。名詞の複数形に関する正確な知識を問う適切な出題だが、選択肢はどれも頻出語彙であり、難度はやや低い。

第2問 設問数(8)、頁数(2)、配点(24)、出題形式のいずれも本試験と同様である。基本的な文法や語彙の知識を問うパートである。本試験と比較して、難度は同等とみられる。

問1 *jm. bekannt sein*という熟語と形容詞語尾の知識を問うている。目的語を複数3格にすることに気付けば、選択肢の中から正解を選ぶことができる。出題の狙いも明確である。

問2 再帰動詞*sich vorstellen*の知識を必要とし、再帰代名詞が3格なのか4格なのかを意味から判断して選ばせる良問である。

問3 適切な関係代名詞を選択させる問題である。先行詞*Anzug*は基本語彙であり、関係文の中で関係代名詞の役割がの目的語であることに気付けば、正解を選ぶことができる。

問4 *nach et. fragen*という熟語の知識を問うている。出題の狙いは明確であり、難度も妥当である。

問5 知覚動詞*sehen* + 不定形に気付けば、選択肢の中から正解を選ぶことができる。難度はやや高い。

問6 従属接続詞*weil*に導かれる副文の意味を正しく理解し、文末に*zu*がついていない不定形が置かれていることに気付けば、難度は高くない。

問7 *Bescheid geben*という成句の意味を問うている。選択肢にある*Bescheid wissen*など、*Bescheid*を使った表現を正確に理解している必要がある。難度はやや高い。

問8 認容をあらわす従属接続詞*auch wenn*という基本的かつ重要な文法知識を問う良問である。

第3問 設問数(4)、頁数(2)、配点(20)及び、6つの選択肢から5つを選び空欄を補う出題形式は本試験と同様である。本試験では日常会話の表現を意識した問いが目立ったのに対し、追・再試験では、日常にもよく使われるものの、前置詞を伴う慣用表現が鍵となる設問が多いという特徴があった。

問1 「取り組む」という日本語が、選択肢の*arbeiten*を使って表現するのか、*sich beschäftigen*なのかをまず判断する必要がある。さらに、複文で主語が普通名詞の場合、頻繁に*sich*が主語の前に置かれることに注意する必要がある。やや難度は高い。

問2 *von et. träumen*という慣用表現と、見た夢の内容を*davon + zu*不定詞句で表現できるかが問われている。

問3 「書き終えた」に対して、選択肢をふたつ使用して*fertig schreiben*と表現できるかが重要になる。加えて、慣用表現*mit et. zufrieden sein*を知ったうえで、*zufrieden*の文中における位置にも注意を払う必要があり、やや難度は高いと言える。

問4 *im Gegensatz zu*に加えて、「普及していない」を*nicht verbreitet sein*と、状態受動で表すことに気付く必要がある。良問であるが、やや難度は高い。

第4問 設問数(7)、頁数(5)、配点(40)である。配点は本試験と同じ40点であるが、頁数は追・再試験のほうが1頁少なく、設問数は1問少なくなっている。

テキストは学校内と帰宅後のふたつの場面で展開される会話で構成されている。会話内容から地図を完成させる問など、設問形式に興味深い工夫がなされている。自分たちが住みたい理想

の街を考える、という受験者も身近に感じられるテーマである。やや難語であると指摘した Einrichtung という語が使われているが、問題を解く上では障害にならず、語彙の選択は総じて妥当であるといえる。

問1 大型ショッピングセンターでの買い物の利点を述べている箇所が理解できているかを問うている。正答となる④が述べている内容は、本文中に容易に見つけることができる。

問2 テキスト本文の続きが4格の目的語になっていることを手掛かりとして、適切な疑問文を選択させる問題である。前後の文脈の理解も重要な鍵である。

問3 前後の文脈理解は必要であるが、主に単語の知識を問う問題となっている。

問4 大きな公園が欲しいとの発言から、地図上のcがParkであることはすぐに分かる。この時点で、②と④に絞られる。さらに、文化施設の後方には食料品店が並んでいる、という会話内容から、bがBäckereiであるとする②が正解となる。選択肢の組合せ方が難しかったと思料するが、テキスト内容を正しく理解できていれば正解できる仕掛けになっていると評価できる。

問5 **28** 前後の会話の内容を正確に理解できていれば、反論するときの慣用表現, dagegen seinを選ぶことができる。コミュニケーションにおける重要な表現を問う設問である。なお、テキスト理解の面に焦点を当てるとするならば、dagegen seinは見せておき、それと合致する発言を補わせる設問スタイルも考えられよう。

問6 会話テキスト後半にある下線部⑳, 買い物と食料品に関するBenの考えを問うている。その内容はテキスト前半に書かれており、該当部分を丁寧に読み進められていれば、比較的容易に解答が導き出せる。

問7 登場人物の個々の発言について、詳細に理解していれば正解できる。選択肢には、理想の街の作りから、登場人物の議論の内容や人々の住まいに関するテーマが入っており、テキストの内容を網羅した設問になっている。難度も妥当である。

第5問 設問数(6)、頁数(4)、配点(30)は、本試験と同じである。テキストは、ドイツ語コースに通うKevinとSaschaが、コース主催のピクニックに何を持参するかを相談している場面を扱っている。テキスト構成は、ふたりの会話文の途中で、ピクニックへの招待メールと、持参できるものを書き込むアンケートフォームが挟み込まれている。ドイツ語圏における日常を強く意識した場面設定は、本試験、追・再試験で共通しているが、テキスト構成の面では、本試験が比較的シンプルなものであったのに対し、追・再試験では昨年の本試験第5問に近い複合テキストになっている。会話テキストは24行、約170語、メールは9行55語、アンケートフォームは11行で約40語(名前と数字を除くと約30語)の合計約260語で、語数は本試験の約320語に比べると、やや控え目である。設問は、基本的な日常表現を問うものが多く、問題作成の意図が明確に見える点を評価したい。難度も全般的に妥当である。

問1 Kannst du da etwa nicht kommen?という否定を含む疑問への対処に加え、dabei seinという日常に頻出する表現を問う良問である。

問2 メール文に引かれた下線部, internationales Picknickについて、Wann beginnt das Picknick?という問いへの適切な返答を選択する問題である。日付と時刻の表現を問う良問である。

問3 ピクニックに持参する物についてのアンケート結果を見て、既に十分にある物が何かを考えさせる設問である。表に挙げられている語彙の知識と(schon) genug habenという表現を知っていれば比較的容易に正解を導き出せる。

問4 会話の流れから、提案の表現が問われていることを理解し、日常的によく使用されるWie wäre es mit et.?という表現を知っているかを問うている。

問5 会話中に触れられているNudelsalatの具材を読み取り、それに合うイラストを選ぶ問題で

ある。語彙自体は容易だが、Nudelが細長い麺だけでなく、マカロニのような形状のものも指していることを知らなければ、やや選択に迷う可能性がある、興味深い設問である。

第6問 設問数(5)、配点(30)は本試験と同一のだが、頁数は本試験より1頁多い6頁である。しかし語数は約257語であり、本試験の語数のおよそ58%となっている。夜遅く相部屋に泊まることになった主人公と、既にその部屋に宿泊している男の会話の大半を占めるため、それぞれの会話の話者が誰なのかを適切に把握することと、内容の理解力が試される設問となっている。語数は本試験との比較で大幅に少ないが、難語が多く、テキスト理解については難度が高めである。その分、設問は比較的答えやすく作成されている印象である。

問1 選択肢を時系列に並べるためには、主人公が男性に話している内容と、会話で触れられた過去の出来事がいつ起こったのかを正確に理解する必要がある。③が最初に来るということに気付き、①がテキストのどの内容に当たるのかを正しく読み取ることが、正解への鍵になる。難度は高い。

問2 第1～2段落の内容を正確に理解できれば、正解を選ぶことは難しくない。それぞれのイラストの違いがより明確である方が親切であろう。

問3 本試験では日本語の問いに対してドイツ語の正解を選ぶという形式であったが、追・再試験ではドイツ語の問いに対してドイツ語で答える。日本語を介することなく、スムーズにテキスト理解から正解を導き出せる。

問4 ここで問われている内容をテキストから読み取ることが求められ、難度は高い。誰がどのタイミングで何をするのかというポイントを押さえれば正解を選ぶことができる。問題作成に工夫が感じられる良問である。

問5 テキスト全般を正確に理解していることが求められる。難度は高くないが、ホテルで出会った男がシュヴァムの息子に手を振った、という内容は、テキスト本文には暗示されているにすぎず、状況から読者が判断する必要がある。

第7問 設問数(7)、頁数(4)、配点(35)はいずれも本試験と同じだが、本文は32行、総語数284語と、本試験(37行、総語数365語)よりも大幅に減少している。本試験では見られなかったイラストが文章の途中に挿入されている点も大きな違いである。本試験では人工知能(AI)ロボットをテーマとする小説の書評を題材にしていたが、追・再試験は複数人でひとつの作業に取り組む際にその活動や成果に個人差が生じることを説明したテキストである。社会心理学的な内容であるが、受験者にとってもそれまでの学校生活で経験する事柄でもあり、その意味では身近で親しみやすいテーマであるといえる。しかし、追・再試験中で難度が高いとされる語の大半がこの第7問に含まれており(Beirtrag, Faulenzen, Investition, Risiken, riskant, Tau, Tätigkeit の7語)、そのほかにもStaffellauf, Phänomen, Verhalten, Verantwortungなどなじみの薄い語が多い。これらの語彙が難度を高めているが、注やイラストを添えることで理解を助けようとする工夫がみられる。文構造については、副文が本試験よりも2倍近く多い上に、受動態や助動詞と組み合わせた文が含まれていたり、本試験ではほとんど見られなかった再帰表現や形容詞の比較級が多く使用されたりと、テキスト自体の難度は本試験よりも高めである。

問1 第1段落では、綱引きを例にとり、作業する人数を倍にしてもその成果が必ずしも倍増するわけではないということが語られており、特に第1段落最後の文を言い換えられるかが問われている。Tauziehenの語は-ziehenの意味と挿絵から推測は可能であるが、sich verdoppelnを理解している必要がある。doppeltやzweimalから導き出せるかが鍵になっており、nicht soとも組合さった正答を選ぶにはやや難度が高い。

問2 グループ活動における個人の働きが減少はしても無にはならない理由を第2段落の後

半から読み取る問題である。sinken, entdecken, bemerkenなどの語の意味や, soziales Faulenzenが選択肢中のgeringe Mitarbeitに言い換えられていることが分かるかも重要である。リレーと綱引きの対比もヒントになる。

問3 前段落で語られたことが、身体的にだけでなく心理的にも起こり得ることを説明する第3段落についての問題である。選択肢に含まれたhäufiger, sich äußernなどが難度を上げている。第3段落2文目のweniger aktivがseltenerで言い換えられることに気付けるかが鍵となる。

問4 第3段落後半の内容を問うている。この設問で問われている部分に難語が集中しているため、多くの受験者にとって難しい問題であろう。hochの比較級höherがRisikenを修飾しかつalsを用いた比較表現であることを注意深く読み取り、集団と個人での意思決定のリスクを比較していることが理解できれば、正解を選ぶことができるだろう。

問5 グループ活動がうまく機能する条件を第4段落から読み取る問題である。特にその前半部分の理解が重要になる。副文が多数使用されているものの、語彙や表現はそれほど難解ではなく、これまでのテキストの内容を理解していれば正答に辿り着ける。

問6 本試験第7問の間6と同様に、日本語の選択肢を使って本文全体の内容理解を問う問題である。本試験と同様、文章のまとめとなる最後の段落については既に問5で問われており、内容的にやや似通った問題になっているため、選択肢又は問いに少し工夫が必要と思われる。

問7 文章内容に合うタイトルを選ばせることで、テキストの大意の把握を試す良問である。gering, geistig, faulなどここでも形容詞に注意が必要で、①と④で悩む可能性があるが、テキストの論点がグループでの活動をいかにうまく機能させるかという点にあると読み取れていれば、正解を選ぶことができる。

### 3 ま と め

今年度の本試験と比べると、総語数はほぼ同じであるが、難語がやや多く、しかもその60%（11語中の7語）が大問7に集中しているという点が気になった。テーマ選択としては、理想の街を考える生徒達の議論（大問4）、語学学校仲間で行くピクニックの計画（大問5）は、高校生・大学生も日本やドイツ語圏で経験する可能性があり、親近感を持って読むことができたのではないだろうか。一方で、大問6はいわゆる文学作品が題材であり、令和4年度本試験、追・再試験、令和5年度本試験では出題されていなかったジャンルである。その点では同一年度の本試験とのギャップも感じる（今年度本試験における大問6のジャンルは「日本に留学したドイツの生徒の報告文」であり、やはり高校生・大学生に身近なテーマ選択がなされていた）。追・再試験の受験者にとって著しい不利益はなかったと願っているが、追・再試験は本試験を受験できなかった人のための措置であることから、できる限り本試験と同等のテキストの種類から出題することが望ましい。